

18) 肺平滑筋腫の1切除例

中山 健司・大関 一 (県立新発田病院)
胸部外科

症例は54歳女性。平成12年8月に右肺炎の既往がある。平成12年12月22日より発熱、咳そうが出現し近医を受診、右肺炎の診断にて当院内科に紹介入院した。気管支ファイバースコープにて右上葉気管支を閉塞するポリープ状腫瘍があり、これが閉塞性肺炎の原因であるとして13年1月30日当科にて右上葉切除術を行った。病理診断は平滑筋腫であった。腫瘍の基部は右 B2 入口部にあり B2 及び B3 を閉塞していた。右 S3 は閉塞性肺炎による硬化性病変が認められた。

19) チアノーゼ性心疾患に対する根治手術前の側副血行路カテーテル塞栓術の臨床的検討

登坂 有子・渡辺 弘 (新潟大学)
高橋 昌・林 純一 (第二外科)

先天性チアノーゼ性心疾患では肺動脈側副血行路の発達した症例が多く、術中・術後管理上、根治術前の処理が必要とされる。16例、計60本の側副血管に対しカテーテル塞栓術 (TAE) を施行し、検討を加えたので報告する。

TAE の適応は DSA を施行し、側副血管の選択的造影により肺実質が造影され、肺静脈から左房への還流が確認できる血管とした。側副血管は肋間動脈、気管支動脈のほか下横隔膜動脈や胃動脈も認め、TAE 前の DSA では腹部大動脈についても観察する必要があると考えられた。また、術前の TAE は安全に行える手技であるが、高齢の症例及び多数の側副血管や太い側副血管に対して TAE を行う場合、TAE 後低酸素血症を認める可能性があり、より慎重に施行すべきであると考えられた。

20) 当科における術後5年経過肺癌症例の検討

矢澤 正知・岡崎 裕史 (県立中央病院)
中山 卓・長島 鎮 (胸部外科)

当院胸部外科での肺癌手術は92年11月より行われ、術後5年経過症例は125例となった。今回この125例を対象に検討を行った。

組織学的病期分類では I a 期37例、I b 期22例、II a + b 期17例、III a 期27例、III b 期14例、IV期4例、不明4例であった。それぞれの他病死を除いた5年生存率は

I a 期88%、I b 期61%、II a + b 期 (3/11) 27%、III a 期 (4/22) 18.2%、III b 期 (5/11) 45.5%、4期 (1/4) 20%であった。II a と II b では a が 0/5、b が 3/6 と N 症例には5年生存者がいなかった。

21) 盲腸原発の小細胞癌の1例

森田 誠市・島影 尚弘
草間 昭夫・内田 克之
岡村 直孝・若桑 隆二 (長岡赤十字病院)
田島 健三 (外科)

肺以外の臓器原発の小細胞癌はまれである。今回われわれは、腸重積にて発症した盲腸原発の小細胞癌の1例を経験したので報告する。

症例は56才男性。腹痛を主訴に受診し CT 検査にて多発性肝転移・回盲部腸重積と診断された。CF では回盲部に腫瘤は認めるも生検で確定診断はつかなかった。悪性腫瘍が原因の腸重積症と考え回盲部切除を施行した。術後病理診断で盲腸原発の小細胞癌と診断されたため、全身化学療法・肝動注療法を行ったが効果なく術後9ヶ月で死亡された。小細胞癌は極めて悪性度が高く、手術適応も含め如何なる治療が有効かは今後の課題と考えられた。

22) 直腸粘膜脱に対しサーキュラーステプラー (PPH 法) を用いた経験例

牧野 成人・佐藤 賢治 (佐渡総合病院)
筒井 光廣 (外科)

近年、内痔核に対する Procedure for prolapse and hemorrhoids (以下 PPH) 法が普及しつつある。今回、直腸粘膜脱に PPH 法を用いた1例を報告する。症例は79歳女性、排便時約5cm の直腸粘膜脱を認めた。切除粘膜を十分確保する目的で巾着縫合を約1cm の幅で2本かけ、サーキュラーステプラーで粘膜を環状に切除した。縫合線上の動脈性出血を結紮止血後、Thiersch 法を追加した。切除粘膜は幅約3cm で一部筋層も切除されていた。術後、疼痛は軽微で出血や分泌物もなく、第8病日に退院となった。直腸粘膜脱に対する PPH 法は有効であると考えられた。